様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　6　月　10　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2005～2008
課題番号：17520123
研究課題名（和文）　今昔物語集本文の享受史研究

研究課題名（英文）　Study on KONJAKUMONOGATARISHU

研究代表者　中根　千絵(NAKANE CHIE)
愛知県立大学・文学部・准教授
研究者番号:80326131

研究成果の概要：
今昔物語集の諸本のうち、江戸末期に多く書写された流布本系について、未紹介本今昔物語集や古本系でありながら流布本系に変容しつつある本を視野に入れつつ、総合的にその営みの意味について考察した。その結果、校訂を目指す諸本と忠実に写すことを目的とする諸本の二様が存在し、それらが古い形態と新しい形態を混在させる要因になっていることが判明した。また、現在の諸本の原本とみなされる鈴鹿本の残る巻では、あまり全巻にゆれがみられないことなどが明らかとなった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	900,000	0	900,000
2006 年度	600,000	0	600,000
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	3,100,000	480,000	3,580,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：今昔物語集

１．研究開始当初の背景

日本の説話文学会では、未紹介本の発見が相次ぎ、一方で、古い本、新しい本にこだわらず、写本の一本一本の生成の現場を再現することが学会の大きな流れとなっている。本研究は、未紹介本の本文研究も含んでおり、それによって、従来、意味の通らなかった今昔物語集の本文をただすことのできる可能性をもっている。また、今昔物語集の諸本について、文庫間のネットワークとの関係を明らかにすることは、今昔物語集写本一本一本の生成の現場を再現するということであり、それは学会の大きな流れと一致するものであった。

２．研究の目的

従来の今昔物語集研究では、諸本は今昔物語集の源にたどりつく為の校訂本として扱われてきた。それ故、諸本それぞれの成立事情は、さして顧みられることがなかった。しかし、２８巻もの大部の巻の書物を丁寧に写す作業には、なんらかの強固な意図があるはず

である。それら一本一本の成立事情を丁寧にたどっていくことは、今昔物語集の近世的価値を考えるうえで重要である。今昔物語集の幾本かは大名家所蔵のものもあり、大名家に何故今昔物語集が必要とされたのかという問題も浮上する。従来、今昔物語集の受容は、中世における興福寺内の仏法部の巻の書写がよく知られている。寺院で書写され、伝えられたと考えられる今昔物語集の仏法部以外の巻がどのような形で書写されてきたのか考えることは近代に発見された今昔物語集の「野生の美」という価値と中世の仏教的価値の間をつなぐもう一つの価値を発見するということである。従来、伴信友と今昔物語集については酒井憲二氏によって論じられているが、それは、鈴鹿本に関してのことである。それ以後、今昔物語集の諸本についての考察はなされていない。諸本の事情と本文の違いを丁寧に調査していくことで、今昔物語集享受史の空白部分を埋めること、それが本研究の目的である。

３．研究の方法

今昔物語集の諸本は、鈴鹿本（現京都大学所蔵）にその源を発するとされているが、鈴鹿本は、巻二、五、九、十、十二、十七、二七、二九の巻しかなく、それ以外は、別の諸本の脱落の少ない本によって補うしかない。流布本でしか補えない巻もいくつか存在する。これらの流布本系諸本が江戸時代に各所で書写された事情を明らかにすることによって、今昔物語集がどのような意味をもって享受されたのか考えたい。具体的には、最近、私が発見した彦根城博物館所蔵本今昔物語集が内閣文庫本Ｂに極めて近い古本から流布本に移行する中間形態をもっていることから、未紹介本今昔物語集の紙焼き写真に基づき、旧日本古典文学大系『今昔物語集』、新日本古典文学大系『今昔物語集』の解説と頭注を基に諸本との比較を行った。その際、未紹介本今昔物語集の本文上の位置づけを明らかにする為に、巻一から巻三一までのコンピュータに本文と校異を入力する作業を行い、わかりやすく表にまとめる作業を行った。未紹介本今昔物語集に形態上、最も近いと思われる内閣文庫本Ｂを所持する東京国立公文書館に行き、現物を熟覧し、必要な部分について紙焼き写真を手に入れた。奥書について、これまで活字で見てきたものと相違がないか確認を行った。岩瀬文庫本今昔物語集を所持する西尾市岩瀬文庫に行き、熟覧の上、紙焼き写真を購入した。また、蓬左文庫本今昔物語集を所持する名古屋市蓬左文庫に行き、紙焼き写真を購入した。その上で、未紹介本今昔物語集本文について、調査し、分析を行った。

４．研究成果

本研究は、今昔物語集の諸本が書写された環境を具体的に明らかにし、その享受の様相を解明しようとしたものであり、その結果は次のようなものである。

『今昔物語』巻一の本文の異同を見ると、彦根城博物館所蔵『今昔物語』と同じ表現を多くもつのは内閣文庫本ＡＢＣと東大本乙である。中でも内閣文庫本Ｂは、彦根城博物館本とのみ一致する箇所が多い。しかしながら、旧日本古典文学大系の底本である東大本甲や東北大本、野村本とのみ一致する箇所もあり、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、流布本系諸本（内閣文庫本ＡＢＣ、東大本乙）と古本系諸本（東大本甲、東北大本、野村本）の間の状態を有する希有な本であるということがいえる。それは、彦根城博物館所蔵『今昔物語』が古本系諸本と流布本系諸本の間をつなぐ本であるということであり、『今昔物語集』がどのように流布していったかという謎を解く鍵がこの本にあるということでもある。『今昔物語』巻二の本文の異同を見ると、彦根城博物館所蔵『今昔物語』と同じ表現を多くもつのは内閣文庫本ＡＢＣと東大本乙である。中でも内閣文庫本Ｂは、彦根城博物館本とのみ一致する箇所が多いが、巻二の場合は、最も古い京都大学本（鈴鹿本）という原本に近い本が残っているせいか、巻一に見られた古態本系と流布本系の中間に位置するという特色とは異なる興味深い結果が得られた。巻二においては、古態本系と流布本系とが整然と分かれ、未紹介本今昔物語集においても流布本系としての特色を検出することとなった。最古本が与える影響の大きさが測られ、諸本の流れを整理する上で、重要な指標が得られた。すなわち、最古本が存在する巻は、古態本系はその表現が崩されることなく書写され、最古本が存在しない巻は、最古本ではない中間の様態を示す本の介入により、その表現が崩されたのではないかという指標である。従って、巻二では、未紹介本今昔物語集と古態を残すとされる東大本甲、東北大本、野村本と一致する箇所は非常に少ない。先にも述べたように、彦根城博物館所蔵『今昔物語』と一致するのは、流布本系諸本（内閣文庫本

ＡＢＣ、東大本乙）である。このことは、古態本と一線を画す流布本の特徴について全体的に把握する必要があり、古態本が鈴鹿本をかなり正確に書写しているのに対し、何故、流布本はそれらとは異なる表記をするのか、総合的に検討する必要があることを示すものである。そこで、『今昔物語』巻三の本文の異同を見ると、彦根城博物館所蔵『今昔物語』と同じ表現を多くもつのは内閣文庫本ＡＢＣと東大本乙である。中でも内閣文庫本Ｂは、彦根城博物館本とのみ一致する箇所が多い。巻三の場合に顕著な傾向として現れるのは、古本系のうちの野村本との一致度が高いということである。巻一の分析では、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、流布本系諸本（内閣文庫本ＡＢＣ、東大本乙）と古本系諸本（東大本甲、東北大本、野村本）の間の状態を有する希有な本であるということを指摘したが、巻三では、特に、野村本が流布本系と古本系との狭間で揺れている様を見てとることができる。この様態からは、次のことが推測できる。すなわち、古態本系は、基本的には、原本通りに正確に写し取ることを目指した書物群であるということである。そこで、たまたま、出会った書物が流布本系であれば、流布本系の表記を引き写すことになる。一方、流布本系の場合は、校訂本文を目指した書物群が含まれる。ただし、彦根城博物館所蔵『今昔物語』の場合、巻四において顕著な傾向として現れるのは、古本系との一致度が高く、内閣文庫本Ｂとの一致度は低いということであった。それは、彦根城博物館所蔵『今昔物語』が古本とも流布本とも巻によって一致することを示しており、そこには解明の余地を残すものとなった。

以上、江戸末期に多く書写された流布本系について、未紹介本今昔物語集や古本系でありながら流布本系に変容しつつある本を視野に入れつつ、総合的にその営みの意味について考察した。その結果、校訂を目指す諸本と忠実に写すことを目的とする諸本の二様が存在し、それらが古い形態と新しい形態を混在させる要因になっていることが判明した。また、現在の諸本の原本とみなされる鈴鹿本の残る巻では、あまり全巻にゆれがみられないことなどが明らかとなった。

また、現在、岩瀬文庫に伝わる『今昔物語集』は、元々、羽田八幡宮が有していたものであることがその印から知られる。現在、それらの書物の一部は、豊橋市の図書館に羽田文庫として残っている。その羽田文庫を訪ねてみたところ、目録が存在していることが判明した。そこで、羽田文庫の古目録から、『今昔物語集』がどのような書物として認識されていたのか考察することを目的に調査を行った。その結果、『今昔物語集』が宗教的なジャンルの中に分類されるのではなく、物語のジャンルに位置づけられていることが判明した。これにより、今昔物語集がどのような目的で羽田文庫に入ったのかが解明できた。また、未紹介本今昔物語集の発見について学会発表を行った際、発表の場でのご教示により、未紹介本今昔物語集に押された印が青山文庫のものであることが判明し、青山文庫と彦根藩学問所とのつながりが浮上した。これは、今昔物語集の諸本のルートをたどる上で重要な知見である。未紹介本今昔物語集と岩瀬文庫本今昔物語集は漢字の使い方などの表現が比較的近い関係にあり、今昔物語集の本を有する近世の文庫間のネットワークの在りようが少しではあるが解明された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　８　件）

（１）中根千絵　霊厳寺の妙見菩薩―日本の星信仰『アジア遊学』１２１　pp.86～93 2009 年　査読無

（２）中根千絵　彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻四の本文の位置づけ『愛知県立大学文学部論集』57 号　pp.35～54）2009 年　査読無

（３）中根千絵 大中臣輔親と月の歌―『今昔物語集』巻二四第五三話より―『日本文学』vol.57　pp.90～94　2008 年 査読有

（４）中根千絵　彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻三の本文の位置づけ『愛知県立大学文

学部論集』56 号　pp.49～78　2008 年　査読無

（５）中根千絵　『古今著聞集』―編者自身も登場『国文学　解釈と鑑賞』第 72 巻８号 pp.143～150　2007 年　査読無

（６）中根千絵　彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻二の本文の位置づけ『愛知県立大学文学部論集』55 号　pp.1～23　2007 年　査読無

（７）中根千絵　彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻一の本文の位置づけ『愛知県立大学文学部論集』54 号　pp.1～32　2006 年　査読無

（８）中根千絵　未紹介本『今昔物語』(彦根博物館所蔵)についての一考察『説林』53 号 pp.１～20　愛知県立大学国文学会　2005 年 査読無

〔学会発表〕（計　２　件）

（１）中根千絵　『古今著聞集』の説話と伝承（説話・伝承学会大会）2006 年 4 月 30 日 奈良女子大学

（２）中根千絵　　彦根城博物館所蔵「今昔物語」の紹介（仏教文学会大会）2005 年６月５日　龍谷大学大宮校舎

〔図書〕（計　５　件）

(1) 中根千絵　「日本の人魚の文化的解釈をめぐる考察」（篠田知和基編『神話・象徴・文化』　pp.425～437　楽浪書院）2005 年

（２）中根千絵　「『今昔物語集』巻十六第三二話小考―槌を持つ鬼と牛飼い童―」篠田知和基編『神話・象徴・文化Ⅲ』　pp.267～286　楽瑯書院　2007 年

（３）中根千絵　「「七人童子絵詞」の童子」共著篠田知和基他『古今東西のおさな神』 pp.157～168　勉誠出版　2006 年

（４）中根千絵　「『今昔物語集』における月の表現二題」篠田知和基編『神話・象徴・文化Ⅱ』　pp.427～440　楽浪書院　2006 年

（５）中根千絵　「日本の人魚の文化的解釈をめぐる考察」篠田知和基編『神話・象徴・文化』　pp.425～437　楽浪書院　2005 年

６．研究組織

(1)研究代表者

中根　千絵(NAKANE CHIE)
愛知県立大学・文学部・准教授
研究者番号:80326131

(2)研究分担者

(3)連携研究者